
ブレイクダウン

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイクダウン

【Nコード】

N4787B

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

前作「カウントダウン」における平次の過去話。全ての始まりである「関西探偵連続殺人事件」を中心に彼の数奇な運命を描く。「カウントダウン」2万人突破記念作。 前作を読んでいない方でもわかるように書くつもりです。

序章

「——胴おっ!!」

鋭い声が館内に響き渡る。

乾いた音と共に相手が後方へ吹っ飛ぶのがスローモーションのように観客には見えた。

床に背中をつけたのを見て応援していた学生達が一斉に歓声を上げる。

審判の声はその声の中に割って入るように高らかに勝者を告げた。

「面あり！一本！勝者服部！——って君！おい君!？」

だが審判の声はすぐに焦ったものになる。

勝者となった少年が倒れこんだ相手にもう一度向かっていこうとしたからだ。

慌てて2人の間に入る。

「もう一本入ったで、君」

「……え？」

審判に肩を捉まれて彼はその時になってやっと現実に戻ったような顔をする。

それまで相手しか見えてなかったような。

いや、何も見えて無かったかのような。

そのことに彼自身気付いたようで、ばつ悪く素直に頭を下げた。

「……すみません、ちょっと熱中し過ぎました」

「今日は練習試合やからええけど、今度やったらは負けにするから気をつけや。」

「じゃあ早く礼をしなさい」

警告と共に礼を促され、彼は倒れた相手を起こしに行く。

相手は天井を仰いでいたため、彼が「とどめ」を刺そうとした事に気付かなかったようだ。

格上の相手に気遣われて恐縮している。

そんな様子を観客席から不安そうに見つめている少女がいた。

遠山和葉。その人である。

彼女の憂う目の先にいる服部平次は相手と向かい合った後きっちり90度頭を下げる。

防具で覆われたその顔は窺い知ることとは出来ない。

それは中学3年の、2月の終わり頃だった。

「もう！あかんやん、平次。あんたあそこで突っ走ってたら
次の大会出場停止になってしまふところやったかもしれへんねんで
！？」

「すまんて言うてるやろ？熱中しすぎただけや」

「その熱中がアカンて言うてんねん」

「何やとー？」

練習試合の帰り道。

途中の駅で他の部員と分れた平次と和葉は電車を乗り継ぎ寝屋川で降りた。

そこからは徒歩である。

2人とも家まで少しばかり距離があるので、さっきの暴走をネタにして

言い合っていた。

どちらも軽い口調だったが。

その内心はわからない。

2月の日の入りは早く、既にあたりは暗くなっている。

眩い大阪の中心街とはいえその闇の到来はすぐに感じ取れた。

もうすぐ3月だがまだまだ空気は冷たい。

冷気を含んだ風が突然2人に打ち付ける。

全身が氷に刺された様な寒さを覚え、和葉はぶるりと肩を震わせた。

「なんや、寒いんか？」

「当たり前やん！そういうアンタも寒いやろ？」

「……まあ、そうやなあ」

少しの間と頼りない返事。

あまり寒くは無さそうな答えである。

それに気付いた彼女ははっとしたが、咎めることはしない。

どうも最近の彼はおかしいような気がするのだ。

どこが、と言われたらはっきりとは答えられない。

だが何かが前と変わってきていることは確実に感じ取れた。

相手を叩きのめすまで止まらない剣道、
寒さをあまり感じないその感覚、

そして周りが見えてもいて、見えていなくもある閉塞感。

彼は和葉よりも少し前を歩いていた。
後ろを振り返ることはない。

彼女は胸が苦しくなるのを感じながら声をかける。
最近ずっと気にかけていたことを。

「なあ平次。……あんま練習ばかりしんときや。
本番で倒れたらどうすんの」

毎日毎日竹刀を振るい続ける姿は鬼気迫るものがあり、
それでいてなぜか哀しかった。

心配する彼女の問いに平次は歩く足を止める。
そして少しだけ顔を彼女に向けた。

「……そんなん言うても、他におもしろいことなんか何も無いやんか」

その表情はついさっきまで軽口を交わしていたものとは違った。

言っなれば「無」の顔。

そうだ、彼は何かを失いかけているのだ。
少年から青年へと近づくほどに。
何かを。

抗うことの出来ない渦に巻き込まれながら。

「……そう、なんや……」

それを止める術を彼女は持っていなかった。

いや、誰も持っていなかったのだろう。

あの探偵と出会ったまでは。

いつものように京阪の寝屋川で降りると、平次は携帯を取り出し家に電話をかけた。

今駅を降りたと告げると、批難の音が右耳から左耳へ貫く。

「今から！？もう10時やで！」

「やからちゃんと電話したやんか」

「そういう問題とちやいます。払^{はら}てあげるから、遅いしタクシー使いなさい。

ホンマにあんたって子はいつもいつも……今日かて8時から何回電話したと」

「あーわかったわかった！！ほな切るし！！」

「こら、平次！」

これ以上駅の構内で携帯越しに母から怒られる姿を通行人に見られたくなくて

慌てて電源ボタンを押す。

無理やり切ったので、帰ったらまたどやされるだろう。

きんきん鳴る耳を撫でながらも、駅前からタクシーを拾って帰路に着く。

あと一ヶ月程で高校生になるとはいえ、塾でもないのにこの時間帯に

帰るのは少々不相応だ。

まあ彼に塾は必要なかったが。

最近学校を出るのが遅くなっているのは自覚している。

理由は剣道の練習に他ならない。

だが練習だけなら自宅にも出来る場所はある。

それをあえて学校の道場でし続けるのは彼の意味だった。

平次は後部座席から街灯が連なる外をぼんやりと見る。

まだ寒さの残る夜に出歩く人はほとんどいない。

ひたすら明かりの行列が続くだけ。

同じ風景がずっとずっと目の前を流れていく。

——なんか、おかしいんや

窓に反射して映る自分に投げかけるように心の中で呟いた。

昔から感じてた違和感がもう無視できなくなってきた。

ざわざわと音を立ててゆっくりと、だが確実に襲う何かが自分をねっとり纏っているのだ。

気持ち悪い。

そう思うことすらある。

その「何か」は最近正体を現し始めている。
自覚し始めたといってもいい。

周りの環境が己の存在証明を隠したのだ。
いや、もう消えてしまっているのかもしれない。
自分の肩に乗る身分や才能が自身を押しつぶそうとしている。

その事実が怖くて恐ろしくてどうしようもなくて。

全てを忘れるために剣を振るい続けるしかなかった。

誰のせいでもなかったから。
だから自分でこの孤独と一生過ごしていかなければならない。

こんな自分はその幼馴染の彼女とも一緒にいるべきではないとも感じていた。

この前も試合の帰りしな彼女に当たってしまった感が否めない。暴走気味な行動を咎められつい本心を言った。

「何も面白いことなど無い」と。

そんなこと言うつもり無かったのに。

気付いたら、突き放すような言葉を口に出していて。

——どうすればいいねん、俺は

運転手に気付かれぬよう小さくため息をついた。

つと、その時自分の視界に赤い光が一瞬通り過ぎた。はっとして窓から食い入るように後方を見つめる。

パトカーのランプだ。

「おっちゃん！ちょっとここで止めて！！」

「ええ！？」

「ええからはよ止めて！！」

思わず叫んで、タクシーから飛び降りると
その赤いランプを目指して駆け寄った。
パトカーが止まっている公園の入り口付近には人だかりが出来てい
る。

——事件か？

そう予想しながら野次馬の側までたどり着いた。
人が多すぎて中々公園の様子が見えない。

いらいらしてぴょんぴょん飛び跳ねてみるが、それでも駄目で。

「あーもうしゃあないなー！」

突進あるのみ。

他の野次馬からしたらはた迷惑な決意を胸に平次は
すんませんと言いつつ黒い塊の中を進んで行こうとした。

が、それは進もうとした矢先に中から出てきた茶色のコートにぶ
つかって阻まれる。

中から人だかりを退けて外へ出ようとした相手もかなりの勢いで進んでいたらしく

まともにぶつかった平次は尻餅をついた。

「いったー…何やねん、ほんま」

「ああすまん、大丈夫かボウズ」

子供をこかしたことに気付いた相手は慌てて平次を起こそうとする。

「まあ別に怪我ないしええけど」

平次はそれを手で制して自分で腰を浮かした。
正面から相手を見る。
そして、

「……あれ？あんたどっかで会ったことないか？」

彼の高機能な記憶装置が働いた。
顔を見た瞬時にデジャビュが起こる。

「そういえば…そのしゃべり方といい色黒といい、つい最近どっかで…」

まじまじと少年の顔を見て彼も同じ感覚に陥っているようだ。
だが先に反応したのは平次である。

「色黒は余計や！…そうやそうや！あんた長野のスキー場におった探偵のおっちゃんやろ？」

「そうか！お前あの時の探偵ボウズか！！」

「めっちゃ奇遇やなあ、おっちゃん！！こんなとこで何してるんや？」

服部平次と片品陸人。

1ヶ月ほど前学校の課外授業先で起こった事件を共に推理した探偵と「探偵気取り」の少年が再開したのはその時であつた。

思いもかけぬ再会に、二人は少し話そうと野次馬の輪から少し離れたところまで行く。

「なんでおっちゃんがここにおるんや？ 長野で探偵やっとなと違っただんか？」

「独立して事務所を開くためさ。今までは集団でやってる事務所にいたしな」

「それでなんで大阪に？」

「長野よりこっちのほうが事件が多いだろう」

「……なるほどな」

平次が苦笑する。

確かに、独立して探偵稼業をやるなら都心部に来たほうが断然仕事、——つまり依頼をしたいような犯罪が——はある。

「で、今はただの野次馬か？ どんな事件が起こってるんかは俺もまだ知らんけど」

「殺人さ。あの仏さんがどうも俺の依頼人の知り合いに似ているよ。うだから、ちゃんと顔を見たかったんだが……」

「だが？」

今度は片品が苦笑いを浮かべた。

「ま、しゃべり方からして関西人じゃない男が『ちよつと遺体を見せてくれ』なんて言ったところで、見せてくれるはずが無ねえな」

実は自分は探偵でこの被害者が依頼に関することかもしれないと、詳しいことを言いたくても聞く耳を持つてくれなかったようだ。

逆に警察は彼を不審がる様子さえ見せたので、仕方無しに現場から立ち去ろうとしたのだという。

そこで先ほど現場に向かおうとする平次とぶつかってしまったのである。

地元以外の地で探偵をするのは思った以上に苦労があるなど、片品は肩をすくめた。

一方、ここに至るまでの経緯を理解した平次は、彼とは反対に明るく笑いかけた。

「なんや、それやったら俺が仲介したるわ」

「何？」

「殺人ならもうすぐ府警本部の刑事も来るやろ。そっちのほうに顔見知りが多いから、おっちゃんの言い分も聞いてもらえと思うで。」

あ、先に電話でもしといたほうがええかな」

「お、おいおい。警察の知り合いかお前？」

携帯電話を取り出す平次に、驚いた顔つきで片品が問う。

すると、電話帳機能を呼び出すボタンを押そうとする平次の指が止まった。

少しだけ少年をまとう空気が硬くなったが、すぐに笑顔でそれは打ち消される。

「そうやで。俺のオヤジが本部長しとるんや」

その後現場に到着した大滝警部に平次が駆け寄っていき、片品を紹介した。

大滝も最初は見知らぬ探偵を警戒したが、いつも可愛がっている上司の息子が「このおっちゃん、俺が以前長野で世話になった人や」と言えばすんなりと信じた。

遺体の身元確認を許された片品は、現場に入りその顔を拝ませてもらった。

大滝も共にテープをくぐる。

どさくさに紛れて平次も入っているが、それを咎めるものがないなかった。

警官が青いシートをめくるとサラリーマン風の男の遺体が横たわっている。

腹を刃物で刺されてるが、顔自体に損傷は無いので確認は容易い。一目で自分の勘が当たっていることがわかった。

「やはり、俺が依頼を受けていた女性の旦那さんに違い無さそうだな」

「そうですか。何の依頼やったか聞いてもええですか？」

「浮気ですよ。この旦那さんがどうもよそで女を作ってるようだから調べてくれと言われましてね。……まだ女の特定は出来てませんが」

「それなら、容疑者の割り出しも早そうやな」

大滝が部下に「被害者の妻と浮気相手の女を調べて来い」と指示を出す。

依頼自体が無駄になりそうだと片品は横で内心ため息をつくが、次におや、と視線を下に向けた。

遺体を屈んでじっと見つめてる平次がいたからだ。

「おいボウズ。あんま見ても良いもんじゃないぜ」

長野の事件の時は状況が状況だったので気に留めるは無かったが、よくよく考えれば、子供が歓迎される場ではない。

そんな片品の言葉が聞こえてないのか、平次は屈んだまま呟いた。

「これ、男のほうの可能性あるんじゃないかな？」

「何？」

「遺体の服に少しだけ濡れた跡がある。今日は雨降ってへんし、この公園に水場も無い。それならどこで濡れたんか……」

平次が立ち上がり、その場一帯をぐるりと見回す。
それに釣られて片品も辺りを見る。

そして街灯が照らすある白い箱型に目が止まった。

「あの公衆トイレか！」

「多分な。きつとあそこで刺して、すぐには発見されにくいこの公園の草むらまで運んだんや。トイレの手洗い場辺りが犯行現場だと仮定したら、刺された拍子に倒れて床にちりばつてる水に触れてしまったと考えられる。そして、あそこは男性用のトイレ。女性用は隣り合った向こう側。道路に面した男性用のトイレに女が入ったら目立ってしゃーない」

「だから男の犯行か」

「可能性が高いとしか言えんけどな。……どうやら、大滝はん？」

後ろを振り向いて、彼の推理を見守っていた大滝に問いかける。

「そ、そうやな！ 奥さんと浮気相手以外にも男で被害者と争いがあつた人間がおるか調べてみるわ！ おおきに平ちゃん！」

大滝は礼を言つて慌てて指示を追加すべくパトカーのところまで走り去っていった。

満足そうにその後姿を見送る少年を、呆れた風に片品が称する。

「ボウズ、お前相変わらず大した推理力だな」

「ボウズやのうて、服部平次や。そろそろボウズはやめて欲しいわ、『片品陸人』さん？」

「参つたな、名前まで覚えてるとはな」

「俺の記憶力を舐めたらあかんでー？」

お手上げといわんばかりに頬をかく片品と、得意げに笑う平次。タクシーでため息をついた時のあのもやもやとした暗い気分はいつの間にか消えていた。

2（後書き）

待って下さっていた方々、本当にお待たせしました。（…いや、待つよりも前にまず覚えていらっしやる方がいるのか？／苦笑）

そして長い間本当に申し訳ございませんでした。
約9ヶ月弱ぶりの更新です。

2万越ヒット記念と銘打っておきながら、現在カウントダウンは二千ク5万過ぎ。

さらには片品さんが出てくる雪女事件もアニメでそろそろ放映するような時期。

いつまで昔の記念を書くつもりだとつつこまれそうですが（汗）、何とか最後まで書きたいと思います。

ちなみに前作も色々修正を加えてました。とはいっても、数字を漢数字に変えたりただの点を三点リーダーに変換したくらいです。

あとは少しばかり言葉の使い回しを変更した程度なので、話の本筋には関係が無い修正です。

念のためそれをここで述べさせていただきます。

余談ついでもう一つ。この作品と前作は、携帯・PCどちらの方が見てもそれなりに読みやすいレイアウトを心がけております。

本来の執筆作法を敢えて無視した書き方が多々あるのはご容赦下さい。

読まれる方が結末を既に知っている話というのは私にとってこれが初めてなんで四苦八苦しそうですが、がんばります。

この妄想だらけのカウントダウンシリーズ、よろしかったらお付き合いくだされば幸いです。

大阪の下町のやや古めの雑居ビルの二階に構えられた「片品探偵事務所」。

そこで主である片品が、これもまた古めかしい石油ストーブをつけ、その上にやかんを置いて湯気を立ち上がらせていた。

側のソファに腰を下ろし、コーヒーをすすりながらファイリングされた資料をパラパラとめくる。

目の前のデスクにも数冊の資料がきつちりと積まれてあった。

引越してきてから事務所に、ダンボールのまま置きっぱなしにされてたはずの本やデータはここ数日で綺麗に整理されている。

しかしこれは、片品がしたことではない。

あの殺人事件で再会した平次が、その時一応渡した名刺を頼りに後日ふらつとやってきて勝手に掃除を始めたからだ。

「なあなあ、おっちゃんの助手にさせてくれへん？」

扉を開けて入ってきた第一声がそれだ。

勿論頼まれた最初は断ろうとした。

この聡明な少年が足手纏いになることはないと思うし、むしろ自分より頭は回るだろう。

しかし何といっても彼は未成年。

事件に巻き込まれたら大変だからと困りきった顔で言ったが、少年は嫌とは言わせない押しの強さを含めた満面の笑顔で、

「大丈夫やって。別に今までもようけ事件は見てきてるし、そうやのうても電話番号とか掃除とかするだけやさかい。な、頼むわ」

そう言われては断りきれない。

まだ大阪に着て間も無く、色々教えて欲しいこともあったので、片品は「仕方ねえな」と溜息を吐き出した。

だがガッツポーズで喜ぶ平次を横目に、「ただし」と付け加える。

「助手になりたい理由を言うのが条件だ」

質問自体は当然のことだろう。

聞かれた平次は少しだけ考えたが、再び笑顔で答える。

「俺、いつか探偵になりたいねん」

「……そっぴや、長野の時も探偵を色々気にしてたようだったな」

「そうや。でも警察の行動ばかり見てても探偵にはなれへんやろ？ やっぱちゃんと本職の仕事を見な探偵の本質はわからへん。やから、片品のおっちゃんの仕事の様子を見てみたいんや」

「そうか」

納得した面持ちで片品は頷く。

探偵になりたいのなら、探偵稼業を側で見るのも必要なことの一つだ。

中学生とは言え、その夢を語る目は真剣そのもので。他県の事件にかまけて警察を首になり、成り行きで探偵になった自分と比べたら立派なことかもしれない。

「これで助手になってもええやろ？」

「……まあ、そうだな」

「よっしゃあ！ おおきにおっちゃん！！」

そこで探偵と助手の「契約」が成立したのであった。

そこから数日たった今日。

日もすっかり暮れ、時計も六時を指そうとする夕食時。

ビルの階段を駆け上がる軽い足取りが聞こえてきた。

古い建物なので外からの音はよく室内に響くのだ。

駆け上がっているのは恐らく平次だろう。

一週間に四回ほど来ると言っていたが、今日はその四回目だ。

授業を終え部活を終え、急いでやってくるのをそれまでの三回で知

った。

しかし、今日の足取りは一人だけでは無さそうだ。
もう二足、聞きなれない足音がコンクリートの階段に響くのが聞こえた。

——女だな

その足音の軽さに予想をつけると、同時に扉が勢いよく開かれた。
扉の向こうにいたのは平次と、予想通りの少女で。

「今日も来たで〜！　　なんや無理やりついて来た邪魔があるんやけど、ええか？」

「邪魔は余計や！」

制服姿で元気良く姿を現した平次の背後に、同じく制服を着た和葉がひよっこりと顔を出す。

「こんばんは、片品さん！お久しぶりですー！」

「おう、あの時平次と一緒に居た嬢ちゃんか」

「はい！　片品さんが大阪に来たって聞いて挨拶に寄らせてもらいました。あ、これ今日の料理実習で作ったクッキー、よろしかった

らどうぞ」

長野の事件で平次と行動を共にしていた彼女を、片品は覚えていた。手袋を外して、かばんの中からごそごそとラッピングされたクッキーを取り出す。

「悪いな。じゃありがたく頂くか」

片品は立ち上がって快く受け取った。
その横で、平次が呆れたような目で和葉を見る。

「……お前、案外抜け目無いなあ」

「何が抜け目やねん。どうせ平次のことやし、世話になるゆつても何もお礼してへんのやる？」

「……」

彼は思わず、ぐっとつまる。

確かに、押しかけて来ている礼は初日の言葉以外何もしていない。すっかり失念していた。

「はは、流石のお前も齒が立たないようだな。まあ、事実お前には助かっているし別にその辺は気にしないでいいさ。——じゃあせつ

かく可愛い嬢ちゃんが来たことだし、三人でコーヒープレイクと洒落込むか」

自分よりも頭一つ分低い中学生二人の頭を両手でばんぽんと叩き、笑いながら踵を返す。

もう二つカップを追加するためだ。

慌てて平次がその後が続こうとする。

「あ、じゃあ俺手伝うで」

「今日はもう座っておけ。客人の相手も助手の立派な務めだぞ？」

「……わかった」

渋々といった感じで頷く平次。

それを認めてから片品は狭い給湯室へと向かった。

カップにコーヒーを入れている最中、彼はコートを脱いでソファに座りながら話している二人をちらりと見る。

真面目な和葉に平次が茶々を入れるのが彼らの主なコミュニケーションらしい。

何かからかいの言葉でも一つかけたのか、少女が怒った様にそっぽを向いているのが見えた。

平次はそんな少女を更に笑って茶々を入れている。

だが、その笑う瞬間ふっと彼の目が暗くなったのを片品は見逃さな

かった。

本当に一瞬だが。

でも確かに、その場に居ないような何も映さない真っ暗な色がよぎった。

和葉は彼から視線を逸らしている為気付かなかったようだ。

——どうやら、何かありそうだな

心の中でそう呟くと、片品はミルクを一筋カップに垂らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787b/>

ブレイクダウン

2010年10月10日20時42分発行